

<楽器紹介> ～フォルテピアノ編～



パイプオルガン



クラヴィコード



チェンバロ

ピアノが誕生する前の鍵盤楽器～バロック時代（1600年頃～）

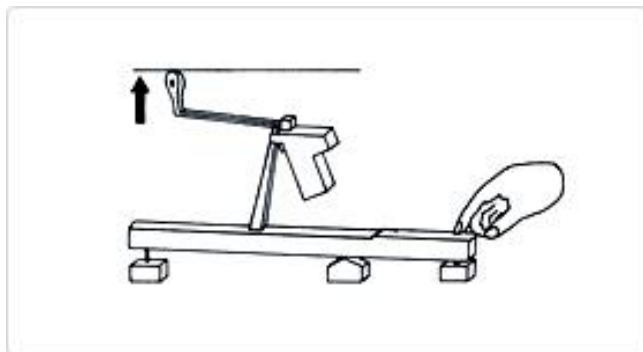
ピアノの誕生（1700年頃）



クリストフオリ
1726年 ピアノフォルテ・レプリカ/山本宣夫氏所蔵

現在のピアノの原型を考案したのは、イタリアのクリストフオリ（1655～1731）という製作家でした。クリストフオリは、チェンバロの音が強弱の変化に乏しいことを不満に思い、1700年頃、爪で弦をはじいて鳴らす代わりにハンマー仕掛けで弦を打って鳴らすという、現在のピアノにつながるメカニズムを発明しました。彼はこのメカニズムを備えた楽器を「クラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテ」（弱音も強音も出せるチェンバロ）と名付けました。この名前を短くつめて、現在は「ピアノ」と呼ばれているわけです。

クリストフォリの鍵盤を叩くしくみ👉

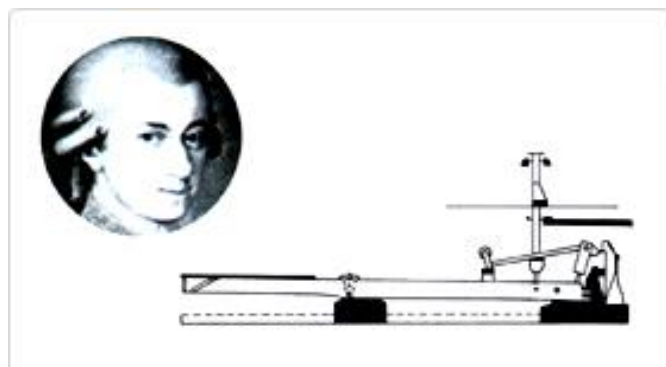


モーツァルトやベートーヴェンの時代～古典派時代（1750 年頃～）



ドイツのピアノ製作にもっとも大きな貢献をしたのはヨハン・アンドレアス・シュタイン（1728～1792）という製作家でした。シュタインはジルバーマンのメカニズムに新たな改良を加えて、ドイツ式もしくはウィーン式と呼ばれるアクションを完成。このモデルは長年にわたって人気を集めました。シュタインのピアノの特長は軽快なタッチと明るく粒のそろった音色。モーツァルトは父親のレオポルトに宛てた手紙の中で彼が最も気に入っているのはシュタインのピアノだと書いており、その音色を愛し、多くのピアノ曲を書きました。

シュタインの鍵盤を叩くしくみ👉



若きベートーヴェンが愛用していたのはウィーンの人気楽器製作者アントン・ヴァルター（1752～1826）のピアノでした。シュタインのピアノと同じく、ウィーン式（跳ね上げ式）のアクション機構によって歯切れの良い軽やかな音色が特徴の楽器です。ベートーヴェンは1802年頃までヴァルターの音色に寄り添いながら、ピアノソナタ第8番「悲愴」、第14番「月光」、第17番「テンペスト」など、彼の代表的なピアノソナタを作曲しました。



☞「月光」に書かれている特徴的なペダルの指示。楽章の始まりから終わりまでずっとペダルを使用するよう指示されている。

ショパンやリストの時代～ロマン派時代（1820年頃～）



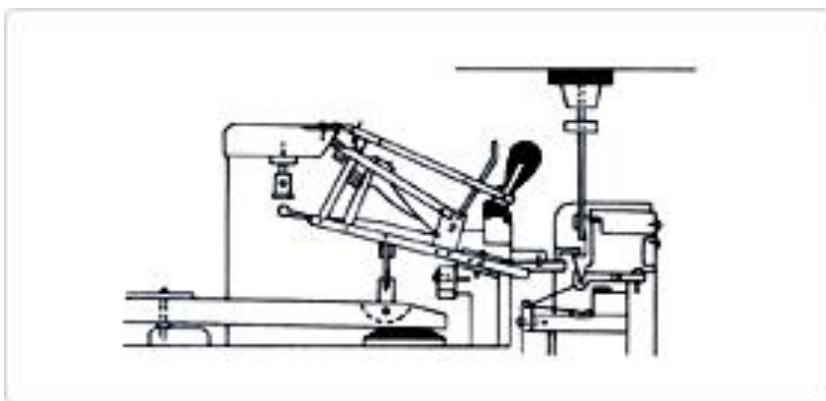
ピアノの音域は、18世紀の終り頃までは5オクターブ（61鍵）が標準でした。しかし1800年を過ぎると徐々に音域を増していきます。そしてショパン（1810～1849）、リスト（1811～1886）の時代には82鍵にまで増大しました。ショパンは、20歳でワルシャワからパリへわたってからは、生涯を終えるまでの19年間、もっぱらプレイエル製のピアノを愛用しました。

19 世紀にピアノ工業はめざましい進歩発達をとげ、需要の増大とともに量産に向かっていきます。また演奏法の発達にともない、タッチの面でもピアノに対する要求は大きくなっていきました。ピアニストたちが、素早い連打やトリルなどの装飾音、速いパッセージの連続などで技を競うようになると、ピアノのアクションにも、より敏感なものが要求されるようになりました。この要求に応じて素早い連打を可能にする画期的なアクションが、1821 年、フランスのピエール・エラールによって発明されました。



素早い連打が可能に！

☞ エラールのダブルエスケープメントアクション



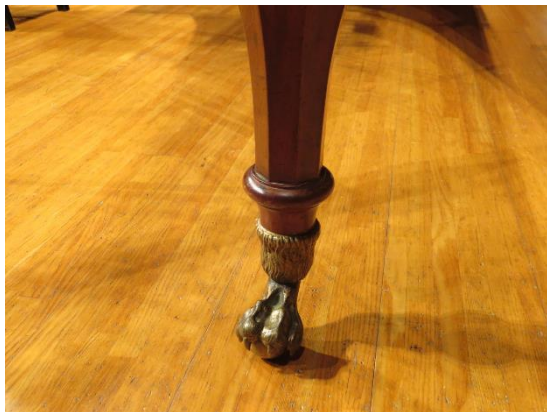
初期のピアノは 1 台 1 台が職人による手づくりでした。しかしフランス革命（1789）以後、それまで貴族のものであったピアノ音楽が大衆化し、楽器の需要が拡大します。その結果、ピアノ製作の工業化が急速に進むことになりました。また、それまで貴族の宮廷で楽しまれていた音楽が、その頃つくられた 1000 人～2000 人規模のホールで演奏されるようになると、ピアノには大きな音量と音の伸びが求められるようになります。弦はより高い張力で張られ、それを支えるフレームに、頑丈な鉄骨が使われ始めました。この時代以降、もはや手づくりで 1 台のピアノを完成させることはできない時代に入っていったのです。

◆◆本公演の使用楽器について◆◆

～アントン・シュヴァルトリンク（1835年プラハ製）～



今回使用している“アントン・シュヴァルトリンク(Anton Schwarbring)”という楽器は、1835年頃、当時オーストリア帝国の支配下にあったプラハで製作されました。鍵盤中央部分に描かれているネームプレートには、製作家のシュヴァルトリンクの名前とともに、オーストリア帝国を支配していたハプスブルク家の紋章（双頭の鷲）を彷彿とさせる鷲の絵が描かれています。



またこの楽器を支える3本のピアノ足も鷲足を象っており、当時の栄華を今に伝えています。加えて、白鍵は真珠層を持つ貝で彩られ、黒鍵には金箔の下地に鼈甲がかぶせられている豪華絢爛たる様相、そしてピアノ作りの中心であるウィーンの伝統を感じられる柔らかさと東欧の香りが感じられる美しい音色が特徴の楽器です。

またこの楽器は、現代のピアノと異なり“ウィーン式（ドイツ式）アクション”と呼ばれる特別な打弦機構を備えています。それは“跳ね上げ式アクション”とも呼ばれ、打弦側(演奏者側)を向いて取り付けられている軽いハンマーを梃子の原理で跳ね上げ打弦するというシンプルな構造を持っていました。そのためタッチが軽く、音色は明快で華やか、きわめて繊細な指先の動きにも俊敏に反応し、さまざまなニュアンスを引き出すことが可能でした。さらに、現代のピアノにはないユニークなペダルシステムを備えていることにも注目です。19世紀初頭におけるウィーンのパianoにはさまざまな音色効果を生み出すペダルがついていました。4本～6本のペダルを有し、鐘や太鼓の音が出る楽器なども珍しくはありませんでした。特に“アントン・シュヴァルトリンク”が持つ弦とハンマーの間に布が入り、幻想的な表現効果を生み出す「モデラート・ペダル」は演奏にいつもの彩りを添えてくれます。

